

# サウジアラビアの状況：政策と妄想

Halper and Associates

(2013年12月5日)

シリアとイランの動きがサウジアラビアに与える影響とサウジアラビアの反応について、激しい議論が続いている。先月ベイルートのイラン大使館前で自爆攻撃があり、25人が死亡した。この自爆攻撃はレバノンのスンニ派が犯行声明を出しているが、ヒズボラのハサン・ナスルッラーフ議長はレバノンのテレビ局に対して、サウジアラビアの情報機関が関与していると述べた。(ただし今日(12月4日)ヒズボラは、南ベイルートでヒズボラのリーダーの一人を暗殺したとして、サウジアラビアではなくイスラエルを非難した)。

12月3日、サウジアラビア情報局長官バンドル・ビン・スルタン王子は、ウラジミール・プーチン大統領とモスクワで会談を行った。会談の内容は、シリア問題が論議されるジュネーブII会議についてであると報じられている。

サウジアラビアのベテラン石油相アリ・アル・ナイミ氏は、12月2日OPEC総会出席のために到着したウィーンで、非OPEC諸国の生産増に伴う加盟国の減産の必要性を否定した。フィナンシャル・タイムズ紙は「笑って、楽観的になろう。悲観主義を忘れれば、きつとうまくいく」との彼の言葉を引用している。11月27日付けのサウジアラビアに関する我々のレポートが、石油について全く言及していなかったことを指摘してくれたヘンリー・ストリックに感謝しなけ

ればならない。事実、サウジアラビアの状況と政策に関する現在の憶測の大半が同じようなものである。政治の混乱は石油には関係がないのかもしれない。しかし常にその背後にあるのは、サウジアラビアが現在担っている、世界市場の生産調整役という重要な役割と、答えの見つからない未来についての疑問である。これはタイトオイル等の技術開発によって、米国に対する、そして恐らくは世界に対するサウジアラビアの重要性が矮小化される可能性があるからである。

下記の最初の記事はサウジ・アラブニュース紙からのものである。記事の表題にもかかわらず、新時代が到来するか、期待外れに終わるかという政治情勢の議論を依然として続けている。著者はカイロを活動拠点にするイギリス人ジャーナリストである。2番目の記事は外交政策ウェブサイトに掲載されたものであるが、その中で「またもやサウジアラビアの妄想に関する情報ではあるが、それでもこれは無視すべきではない」と述べたブライアン・リーに感謝する。著者のジョン・ハンナはディック・チェイニー副大統領の元国家安全保障補佐官であり、現在は親イスラエルの「中東政策ワシントン研究所」に在籍している。したがって、妄想のなかには、サウジのイランに対する妄想と言うよりは、米国のオバマ大統領に対するものもあり、この混在は潜在的に危険なものである。

GCC（湾岸協力会議）は防衛力を強化しなければならない

（リンダ S. ハード，2013年11月26日）

イランと P5 + 1 の外相協議が6ヵ月間の暫定合意に達した。米国とその同盟国はこの暫定合意を、地域戦争回避への重要なステップと位置づけて歓迎している。IAEA の査察官によるイラン核施設への立ち入り査察の受け入れに加えて、ウラン濃縮を5%に制限しプルトニウム計画を中止するというイランの約束は、確かに少なくとも一時的にはイランの核兵器開発への野心を後退させるであろう。帰国したイランの交渉団は喝采の声をあげる群衆に取り囲まれた。国内経済が急激に落ち込んでいるイラン政府は、国際社会に再度加わる意思を固めたようだ。

この地域の米同盟国のなかには、米国政府が、軍事超大国に変わろうとしているイランとの誤った「大きな取引」のために、近い将来同盟国を放り出すのではないかと恐れている国もある。湾岸諸国は、UAEの3つの島をイランが侵略し占拠した時に、この占拠をイギリスと米国が認めた経緯をいまだ忘れてはいない。また近年では、ホルムズ海峡を封鎖する、湾岸油田に放火する、「ペルシャ湾」ではなく「アラビア湾」と標記している航空会社はイラン領空を通過させないなど、イランによる度重なる脅迫があったことも忘れてはいない。悪いことには、この地域への米国主導の軍事介入とそれがタイミングを逸したものだだったことが、かえってイランの影響力を強める結果になってしまった。かつてはスンニ派の強力な砦となっていたイラクは、事実上イランのムッラー（シーア派聖職者）に引き渡された。オバマ大統領がシリアの化学兵器施設への攻撃を回避したことは衝撃的であった。このシリア反体制派への裏切りは、バッシュール・アサド大統領に力を与え、ひいてはイランを勢い付かせた。シリアの化学兵器

廃棄は内戦停止にはあまり役に立たないのではないかという湾岸諸国の懸念は捨て置かれた。現在米国とイランの関係は改善を見せている。イランがジュネーブII会議への参加を招請されることは、確実視されている。この会議でイランはアサド政権を支持するであろう。加えて、オバマ政権はスンニ諸国を安定させる努力を怠っている。オバマ政権はエジプトの暫定政権を非難して、軍事支援を打ち切ることで、暫定政権の足もとをすくった。

リビアの最高指導者ムアマル・カダフィ打倒に向けてオバマ政権が果たした役割は大きかった。しかしリビアの現状はどうだろう。イエメンの「テロリスト」を標的とする米国の無人機攻撃は、憎しみと混乱を生み出し、イランの代理人に足場を確立する機会を提供しただけだった。原則として、イランを孤立状態から救い出すことは悪いことではない。ただし、西欧がイランの核開発計画だけを重視するのは、シリアの化学兵器と同じように、根本の問題から注意を逸らしているだけである。イランが国際社会に再び参加するためには、IAEA の査察やハサン・ロウハニ大統領からの魅力的な親善メッセージよりも遙かに多くのものが必要である。イランとの緊張緩和策すべてが網羅されていなければならない。イランが良き隣人になろうとしていることを、言葉ではなく行動で示してGCC加盟国を説得する必要がある。第一にイランは、シリアとレバノンの内紛をイランの代理人であるヒズボラを通して煽るのを止め、かつアサド大統領の退陣を強く働きかけなければならない。第二にイランは、イエメンのフーシー派等への資金と武器の提供を中止しなければならない。第三にイランは、バーレーンが安定を取り戻せるように、同国への干渉を止めなければならない。

イランが武器、資金、シーア派のイデオロギーをスンニ派諸国に輸出することはないと最高指

導者アリ・ハメネイ氏が約束すれば、湾岸諸国の懸念が軽減されるであろう。ただし期待してはいけない。米国は分割統治の方針を利用して、地域への影響力を保持し、兵器を売却して何十億もの利益を得ている。スンニ派とシーア派の対立を煽ると同時に二股をかけることが米国の利益となる。つまり、中東・湾岸に大きな脅威がなく平和で団結した地域になれば、米軍はこの地から直ちに立ち去ることを余儀なくされる。結局、ワシントンもその新しい親友テヘランも信じることはできない。したがってスンニ派のアラブ諸国にとっては、選択肢の幅を広げかつ防衛力を強化することが不可欠である。かつて庇護者と見なしていた米国はもはや当てにはならない。

ただし何が起こるか分からない。イランの人々は新しい合意に喝采の声をあげているかもしれないが、強硬派が最高指導者の耳に何を囁いているかは誰にも分からない。同様に、米国の民主・共和両方の議員の多くが極めて懐疑的であり、イランに対してさらなる懲罰的制裁を加えたくてうずうずしている。イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相は特に激怒しており、この合意は「歴史的な過ちだ」と述べて、この合意に縛られることを拒否している。親イスラエルのロビーは、オバマ大統領が簡単に誘いに乗らないようにするために、懇意にしている議員を説得しなければならない。既に実施されている制裁を解除する権限は大統領にはなく、解除するには議会の承認が必要となる。ジュネーブで調印された合意がイランと西欧の関係に新時代の到来を告げるか、それとも期待外れに終わるかは、その時が来ないとわからない。

## 王国の恐怖と嫌悪

(ジョン・ハンナ, 11月29日)

オバマ政権とイランとの核交渉に関しては、政治評論家や政策立案者にとって大きな懸念材

料はなくなった。核交渉の合意が及ぼす最大の影響は、イランが核攻撃を受けないのは確実ではないが、サウジアラビアが将来核攻撃を受けるのが確実になったことである。事実、中東の軍備競争のリスクが必要以上に増大して核に対する即応態勢に入っている。そして次のスンニ派とシーア派との戦争では、ますます核兵器が使用されそうな気配である。

特に合意内容の次の2つの側面は、イランによる爆撃がほぼ確実であるというサウジアラビアの恐れを増大させることになる。第一に、包括的解決が交渉されるべき時になされた先制的譲歩は、ウラン濃縮の永続的可能性をイランに与えた。ウラン濃縮は核兵器開発計画の根幹部分である。米国は目にも留まらぬ速さで、少なくとも5つの安保理決議の法的拘束力を有する要件について致命的な妥協をしたようだ。これについては、自国の存在が不安定な状態にあると信じている主要同盟国に対する、事前通知も適切な説明もなかった。米国の譲歩が安保理を蚊帳の外にただけでなく、王国の核心的利益を危険にさらしたことを理由に、サウジアラビアは国連安保理の非常任理事国への就任を拒否した。就任拒否が自国の利益にかなうことを、サウジアラビア国民が確認する必要があったとすれば、確認できたに違いない。

第二に、合意は包括的解決策でさえも期限付きであることを示唆している。言い換えれば、イランの核開発計画にいずれ課されることになる制限は、いずれも恒久的なものではない。含意は極めて明確である。ある時点では再度交渉する必要がある(3年, 5年, 10年後?)。それが国際的な制裁措置体制が崩壊してしまったずっと後では、イラン・イスラム共和国の核開発計画は足枷が外れてしまい、核拡散防止条約の下で他の健全な加盟国と同じ権利が享受できるようになる。これは、イランが日本のように殆ど無制限のウラン濃縮とプルトニウム再処理能

力を持ち、その気になりさえすれば、いつの日か産業規模の核開発計画を築き上げられるようになるライセンスのようなものである。

もちろんイランは日本ではない。日本は平和で、西欧と足並みを揃える安定した民主主義国家である。イランは暴力的でテロを支援し覇権を求める修正主義国家であり、核拡散防止条約に次々と違反している。またイスラエルの消滅を図り、中東からの米国の追い出しを画策し、サウド王室を破滅させようと狙っている。

オバマ大統領がその違いを完全に理解しているかどうかは分からないが、サウジアラビア国民は確実に理解している。

もちろんサウジアラビアの懸念は、先週の合意の範囲をはるかに超えて広がっている。サウジアラビア政府にとっては、イランの核兵器開発に向けた動きは、イラン政府が支配する国の利益のために中東全域の秩序を覆そうとする作戦の、最も危険な部分にすぎない。言うなれば、拡大する兵器庫を完成させるための最後の兵器である。この作戦の中心にあるのはサウジアラビアの不安定化と弱体化である。これは、サウジアラビア側から見れば、イラン革命防衛隊（IRGC）があらゆる所に影響力を拡大し触手を伸ばすために、暴力、破壊行為、恐怖、暴動の種をさかんに蒔いていることになる。バーレーン、イラク、レバノン、イエメンなどが良い例である。そして最も破壊的だったのは、シリアで虐殺を扇動して、バッシャール・アサド政権を救った、IRGCによる大規模介入であった。

「この核交渉では、サウジアラビア王国の国益に対して、イラン・イスラム共和国が現実突きつけている問題の核心部分が無視されている。その上イランが域内の覇権を声高に主張し合法化することで、この問題をさらに悪化させる恐れがある」というのが、公平かどうかは別として、サウジアラビアの見解である。

オバマ大統領のシリアとの化学兵器交渉によ

って、アサド政権の殺人マシン強化が暗黙のうちに公認されたことが確実なように、長年にわたるイランの域内覇権の追求にゴーサインを与えることになるというサウジアラビアの懸念も確実なものになるであろう。サウジアラビアの見方では、イランの覇権追求はメッカとメディナに達するまで終わることはない。

「米国とイラン間の交渉の犠牲にされる」というサウジアラビアの妄想は、今に始まったことではないと言える。

だが実際にサウジアラビア国民は、現在の状況から以前よりも強い孤独感を抱いている。

俗に言うように、妄想患者にさえ敵はいる。サウジアラビアの国益に致命的と思われる問題が次から次へと起きていく（バーレーン、エジプト、イラク、シリアそして現在のイラン）。サウジアラビアの目から見れば、オバマ政権は同国の最優先課題に、よくて無関心、悪くて公然と敵対している。今や極めて明確で危険なパターンが完全に確立されたらサウジアラビアは考えている。そしてその内容は醜いものである。すなわち長年の同盟国を犠牲にし、裏切りさえすることである。実際サウジアラビアは、ベンヤミン・ネタニヤフ首相が対イラン交渉を激しく非難するのを聞いて、中東における米国の一番の友人であるイスラエルですら免疫がないことに気が付いた。そして、サウジアラビアはどのようなのだろうか？

米国の国力への信頼、目的、能力に対する信用危機はかつてないほどに高まっている。サウジアラビア国民は、中東の遙か「向こうに注目すべき全世界がある」というスーザン・ライス国家安全保障担当補佐官の宣言と、米国は中東に「過剰な投資をした」というライスの前任者の嘆きに着目してきた。オバマ大統領の一見無謀に見える行動の裏に綿密な計算があることをサウジアラビアは確信している。米国は地域紛

争への露出と関与を意図的に抑制して、米国の役割や指導的立場をスリム化、縮小して、いずれは撤退しようとしている。

弱腰で節操のない大統領、疲れてうんざりしている国民、衰弱した経済、機能不全に陥った政治、エネルギー自給の向上など（以上はサウジが挙げたもの）、理由はどうあれ、中東の同盟国への支援となると、米国は危険なほど息切れしているというサウジ政府の確信は、ますます強くなっている。オバマは撤退したがっている。シリアやイランとの交渉のように、面子を保つ交渉が当節の流行りである。このような交渉が意図するのは、地域における最も危険な問題を解決することではなく、大統領が円満に退陣するまで問題を先送りすることである。そのため、サウジアラビアの重大な国益が犠牲になりかねない。

背信が極めて個人的なものになったことは注目に値する。オバマ大統領とその側近に対するサウジアラビアの失望感筆舌に尽くし難い。特にジョン・ケリー国務長官はひんしゆくを買った。8月21日のアサド政権による化学兵器攻撃の直後から数日、ケリー長官とサウジアラビア首脳陣との電話会談は明らかに浮き足立っていて、激しいものであった。「シリアが化学兵器に関してオバマ大統領のレッド・ラインを越えた証拠は確実なものだ」とケリー長官が会談相手に保証した。米国がアサド政権を処罰するために攻撃するのは確実であった。サウジアラビア国民は喝采した。オバマがやっと重い腰を上げて、西欧を有利にし、イランが不利になるように紛争の軌道を修正する覚悟ができたのだと考えた。諜報活動、戦争計画、標的情報を交換したと伝えられた。サウジアラビア国民は、作戦を経済的に支援するだけでなく、自国の戦闘機と爆弾で積極的に参加するように煽られていたようだ。アブドラ国王が、DEFCON 2（戦争寸前の状態と）同等レベルの警戒態勢に入る準

備をするように、関係省庁に命令したと噂されている。次いで8月31日、サウジアラビアの人々はCNNにチャンネルを合わせた。これはレッド・ラインの実施が目前に迫っていることをオバマ大統領が発表するのを期待してのことだった。しかし彼らが見たのは、オバマが尻込みして議会で決定を任せたとという結果だった。ケリーが故意に騙してミスリードしたことにサウジアラビア国民は激怒し、啞然とし、そして確信した。ケリー自身がオバマの決定には不意打ちを食らったと言われても、サウジアラビア国民にとって慰めにはならなかった。嘘つき？それとも、とんだ間抜け？いずれにせよ、サウジアラビア国民にとっては災難であった。

残念ながら、サウジアラビアの利益にとって極めて重要と考えられる問題が次々と起こり、同じことが何度も繰り返される。このように、サウジアラビア政府はシリアの化学兵器問題に関する米国とロシアの交渉についてCNNで知った。またオバマ大統領がエジプトへの軍事支援の大部分を打ち切ったこともCNNで知った。そして2週間前、サウジアラビア政府は、P5+1とイランが今にも初の（サウジ政府から見れば極めて間違った）合意に達しようとしていることをCNNで知った。ちょうどその週のはじめにケリー長官が、シリア問題での大失態の後遺症を少しは緩和しようとして、サウジアラビアに居たにもかかわらずである。結局彼は二重に裏切ったことになった。オバマ政権はほぼ一年にわたり、秘密の二国間交渉をイランと続けてきた。米国はこれを同盟諸国に隠し続けてきたつもりであったが、その内容はサウジが自身の情報源から既に得ていた情報に細部を付け加えただけのものであった。ここ数日で明らかになった詳細な事実は、ワシントンとムッラーとの間に恐ろしい取り決めがあるという王国の疑惑をかき立てるだけであろう。サウジ国内の雰囲気はこれほど悪くなると、控えめに言っても

危険な状況である。米国から見れば決して有益でなく破壊的でさえある自力救済へとサウジアラビア国民を駆り立てる要因は、深刻であり増大している。追い詰められ、伝統的な支援者である超大国に捨てられたとサウジアラビアが感じているのは、彼らが自身の生存を賭けて、必要と思うことを実行するであろうことを疑う者はいない。サウジアラビアの力を過小評価するのは誤りであろう。サウジが支援せざるをえないグループ（イランとの激しさを増す代理戦争を担っている）から、石油価格、地域における存在感を増したロシアと中国への支援（と資金提供）まで、サウジアラビアは米国にとって不愉快な不意打ちをかけるだけの力がある。サウジアラビアは愚痴をこぼし不平を言ったりはするが、米国の重要な利益に害を及ぼすことは結局できないと我々が思い込むのは、極めて危険である。

それに加えてサウジアラビアには核爆弾の問題がある。アブドラ国王は過去数年間のハイレベル会談で「イランが核武装するなら、我々も核武装する」と何度も明確に述べている。アブドラ国王はあまり策略を用いるような人ではない。明解で、一貫した人である。はったりをかけたりはしない。有言実行の人物である。

パキスタンとの核開発計画に関する長年の協定についての話がすべて事実とは限らないが、ある日突然、サウジアラビアの戦力組成に僅かな核兵器保有量が出現と気付いても、ショックを受ける人が誰もいない位の繋がりは存在する。イスラエル対イランの核問題は膠着状態にあるが、その見通しにあまりショックを受けないとしても、これにサウジアラビア対イランのらみ合いが加わると、どうなるのだろうか。ホルムズ海峡を挟んで2つの核兵器保有国がらみ合っていると考えてみよう。宗教的憎悪は収拾がつかなくなり、弾道弾の飛行所要時間は分単位で測定され、指揮・統制プロトコルは堅

牢とは言い難い。核攻撃合戦とまではいかなくても、それが石油価格のプレミアム要因に及ぼす影響はいかなるものであろうか。「印座に世界的景気後退に陥る」などと言える者がいるのだろうか。

これは明らかに我々が向かう方向である。これは私の勘だが、イランとの合意が、最後の審判の日を危険なまでに近づけた。今となってはサウジアラビア国民を崖っぷちから引き戻すことができるかどうかは分からない。それでもオバマ政権は努力すべきである。手始めは、それも迅速に行う必要があるが、サウジアラビアの国家安全保障担当補佐官・情報局長官のバンダル・ビン・スルタン王子との会談であろう。元駐米サウジアラビア大使のバンダルが、現在は王国とパキスタン軍・情報局との親密な関係のパイプ役を努めていることは言うまでもないが、イランの脅威と戦うアブドラ国王の取り組みの先鋒を努めていることも明らかである。バンダルは、この数ヶ月で事実上あらゆる主要国の首都に現れている。注目すべき例外はワシントンである。これだけで状況がどれほど悪化したかが分かる。オバマ大統領は一刻も早く自らバンダルを大統領執務室に招いて、複雑な問題すべての戦略的状況、並びに米国とサウジアラビアが一緒に何ができるかについて、極めて率直な話し合いをする必要がある。ここに至っては、過激な行動が必要ないことをサウジアラビアに納得させられる可能性があるのは、最高司令官だけである。

納得させるためにオバマ大統領が何を言わなければならないかは、別の問題である。核交渉については、追加合意のすべてにおいて、最低でも、次の2つの要求をイランが受け入れざるをえなくなることを保証できなければならないだろう。既存能力の（限りなくゼロに近い）大幅な後退と、特別に設計された極めて厳格な立入査察制度である。そしてイランが最終的に拒

絶した場合は、大統領は「間違っただけ」を放棄し、かつイランの核プログラムの最も危険な要素を破壊するために断固として武力を行使する用意があることを納得させなければならないだろう。もしそうなったら、また真剣であることの証として、大統領はそのような取り組みに対してサウジアラビアが貢献できる内容についても言及するかもしれない。例えば世界原油市場とアラブ世論のコントロール、基地使用と領空通過の権利、資金提供、直接的軍事参加が挙げられる。

イランが攻勢に出た場合、シリアはサウジアラビアにとって極めて重要な国である。大統領は、米国の戦略変更に関して、何か斬新で説得力のあることを言う必要に迫られるだろう。これは、アサド政権とその資金提供者であるイランに対するパワーバランスを変え、一方でアルカイダの存在意義を失わせるために、王国に協力することを真剣に約束するものでなければならない。地域におけるサウジアラビアの優先順位や、両国の相互利益を促進するための持続的で慎重な協力方法について真剣に議論することも必要になる。(例:レバノンのヒズボラ、イエメンのフーシー派反乱軍、エジプトのムスリム同胞団、イラクにおけるイランの影響の弱体化)。

オバマ大統領が上記のいずれかでも行う用意がある可能性は殆どないことを、私は認めざるをえない。イランの指導者の第二の天性とも言えること(敵と闘いながら同時に交渉すること)を行うのは、彼の DNA にはない。そのうえ、これは大統領が中東の泥沼と見なしているもの

から米国を解放する幅広い戦略目的とは正反対のことであろう。実のところ、オバマ大統領は自分が正しい方向に向かっていると考えている。もしこれによってサウジアラビアが不安になるなら、もしこれによってサウジアラビアが適応せざるをえなくなり問題を自身で解決するなら、それはそれでよい。彼はサウジが自ら墓穴を掘ることなくできることは多くないと考えている。オバマは次のように確信している。最終的には、我々が彼らを必要とするよりも彼らが我々を必要とする度合いが遙かに大きいことを、サウジアラビアは知っており、それに応じて行動するであろう。せいぜい、頭をなでて、米国がサウジの懸念を真剣に受け止めていると安心させ、重要な問題について頻繁に相談すると約束すれば、彼らを黙らせ足並みを揃えさせるには十分であろう。

オバマ大統領が正しいことを願っているが、間違っているかもしれない。そしていつか極めて不愉快な現実と直面することになるのではないだろうか。私の懸念は、私たちが何年後かに振り返って、アラブ世界における米国の立場を回復し、世界的な拡散防止制度を強化するという2つの崇高な大志を抱いて就任したオバマ大統領が、その大志を実現するどころか、その両方に大きなダメージを与えたと結論づけることである。このダメージを短期間に修復するのは不可能ではないにしても困難なことであろう。そして修復には流血、財産、米国の利益という大きな代償が伴うことになるであろう。もしそうなれば、我々は確実に苦難の道を歩むことになるわけで慎重にならなければならない。